

第Ⅲ章

寄 稿

みやぎ心のケアセンターが地域にもたらしたもの

宮城県精神保健福祉センター

所長 小原 聡子

震災後7年を経た今、みやぎ心のケアセンター（以下、コケセン）は地域支援者や住民にとって自分たちを支援してくれる当たり前の存在となっている。しかし、開設当初は地域がまだ安定し切らず、かつゼロからの立ち上げであったため、存在の認知がなされ、その活動が軌道に乗るまでには相当の努力と創意工夫が必要だったと思われる。加えて被災自治体や県内外の関係者の協力があってこそ現在の充実した活動であろう。

私は精神保健福祉センターの立場でコケセンに関わらせて頂いてきたが、その活動の強みを挙げると2点に集約されると思われる。

1点目は「現場との近さ」である。現場に出向くアウトリーチ支援が中心であるため、コケセンの活動は市町村からすると従来の連携機関よりもより近い関係性のように思われる。なお、さまざまな意見がある所ではあるが現場に常駐する支援としての出向は、市町村にとっては常に側にいてくれるので何より心強く、コケセンの特徴的な活動といえる。

2点目は一次から三次予防まであるいは個別支援やスーパーバイズ、人材育成まで、どのようなニーズにも対応できる「精神保健福祉分野の多職種チーム」という点だろう。これまでどうしても保健師中心にならざるを得なかった地域活動に多くの専門職が投入されたことは地域にとって相当のインパクトだったと思われる。これは震災時の心のケアチームの活動とも共通しており、以降地域支援者は専門職と協働する経験を積み重ねてきた。

さて、これを書くにあたり、被災自治体保健師数名に改めてコケセンへの思いを尋ねたので紹介したい。

まずはその存在については、「定期的に会えて、頼みたい時に頼める。頼りになる存在」「サポートしてくれる存在」として強く支持されていた。役立っている点としてはさまざまな活動が挙げられたが、「男性スタッフありがたい（特にアルコール）」「メンタルヘルスのすそ野が広がった」「事業に関する助言をもらえ、考えを整理してくれる」「現場は疲弊しているので、エンパワメントしてもらっている」などが印象に残った。活動そのものだけでなく、スタッフとのコミュニケーションやコケセンとのつながりそれ自体も保健師らの支えになっていることがわかった。

次に専門職との協働については、「精神分野に特化した専門家なので保健師の負担が軽くなった」「専門的なアセスメントや幅広い支援方法が助かる」「俯瞰した立場で県内外の情報を教えてくれる」などであり、特に精神障害者への個別支援については「コケセンはプロ」「コケセンは病気をみしてくれる、保健師は生活全体をみる」の言葉にあるように、地域におけるより専門的な人材の必要性を実感するとともに保健師としての専門性をあらためて振り返る機会になっているようだった。今後についても尋ねたが、「コケセンがなくなることを考えると、自分達で歩いていかなきゃと思うが・・・」としつつ、「保健師だけでは代替できない」と本音が語られた。これはマンパワーのみならず、専門性の担保の難しさを示していると思われた。

今回コケセンが地域にもたらしたものを私なりに振り返った。被災者支援からスタートした専門職と地域支援者との協働により、精神保健福祉活動の幅が広がり、かつ支援の底上げにつながった。一方でその活動内容の幅広さやマンパワーの必要性などから、地域精神保健福祉ニーズの潜在的な大きさをあらためて実感した。

今後は被災者支援から平時の地域精神保健福祉活動への移行を見据え、地域における専門職の確保に加え、この間で培われた活動の専門性をどのように維持し、深めてゆくのが大きな課題である。あらためて地域のニーズに対して自分たちは何ができるのか、皆で考える時期に来ていると思われた。